

# Stability of Volterra difference equations

早稲田大学理工学部 室谷義昭 (Yoshiaki Muroya)  
Department of Mathematical Science, Waseda University

東京理科大学理学部 石渡恵美子 (Emiko Ishiwata)  
Department of Mathematical Information Science, Tokyo University of Science

## 1 はじめに

Volterra 差分方程式

$$\begin{cases} x_{i+1} = qx_i - \sum_{j=-\infty}^i a_{i,j} f_{i-j}(x_j), & i = 0, 1, 2, \dots, \\ x_j = \phi_j, & -\infty < j \leq 0, \end{cases} \quad (1.1)$$

について考える。ここで  $0 < q < 1$  であり、関数  $f_j(x) (0 \leq j < +\infty)$  が与えられ、 $a_{i,j} \geq 0$  ( $-\infty < j \leq i$ )、 $\sum_{j=-\infty}^i a_{i,j} > 0$  かつ  $\sum_{i=0}^{\infty} \sum_{j=-\infty}^i a_{i,j} = +\infty$  とする。さらに、 $\phi_j, -\infty < j \leq 0$  と

$b_i = \sum_{j=-\infty}^0 a_{i,j} f_{i-j}(\phi_j), i \geq 0$  は有界であり、次を満たす狭義単調増加関数  $f(x)$  が存在するとする。

$$\begin{cases} f(0) = 0, & 0 < \frac{f_j(x)}{f(x)} \leq 1, \quad x \neq 0 (0 \leq j < +\infty), \\ f(x) \neq x \text{ のとき, } & \lim_{x \rightarrow -\infty} f(x) \text{ が存在し有限である.} \end{cases} \quad (1.2)$$

これまでに、有限個の遅れを持つ非線形微分方程式に対して、Muroya, Ishiwata, Guglielmi [3] と Uesugi, Muroya, Ishiwata [5] の結果が得られており、本報告では、これらの結果を非有界遅れの差分方程式 (1.1) に応用する。(1.1) の零解の大域漸近安定性の十分条件には若干の制約はあるが、Volterra 積分微分方程式の差分法の安定性解析にも応用可能である (Vecchio [6] と Song, Baker [4] 参照)。

ここで、定義を述べておく。

**定義 1.1** (1.1) の零解が**一様安定**とは、任意の  $\varepsilon > 0$  と非負の整数  $i_0$  に対して、(1.1) の解  $\{x_i\}_{i=0}^{\infty}$  が  $\sup\{|x_{i_0-j}| \mid 0 \leq j < +\infty\} < \delta$  のとき、 $|x_i| < \varepsilon, i = i_0, i_0 + 1, \dots$  となる  $\delta = \delta(\varepsilon) > 0$  が存在することである。

**定義 1.2** (1.1) の零解が**大域吸引性**を持つとは、(1.1) のすべての解が  $i \rightarrow \infty$  に対し、0 に収束することである。

**定義 1.3** (1.1) の零解が**大域漸近安定**であるとは、一様安定であり、かつ大域吸引性を持つことである。

**定義 1.4** (1.1) の零解が**一様漸近安定**であるとは、一様安定であり、かつ、(1.1) の任意の解  $\{x_i\}_{i=0}^{\infty}$  が  $|x_j| < \delta, -\infty < j \leq 0$  ならば、 $\lim_{i \rightarrow +\infty} x_i = 0$  となる  $\delta > 0$  が存在することである。

## 2 Volterra 差分方程式への応用

この節では、非有界遅れを持つ (1.1) の零解の大域漸近安定性の十分条件を考える。有限個の遅れを持つ差分方程式に対する条件と比べて、証明に少し特別な工夫が必要である。

**補題 2.1**  $\{x_i\}_{i=0}^{\infty}$  を (1.1) の解とする。任意の  $i \geq i_0$  に対し、 $x_i \geq 0$  (respect.  $x_i \leq 0$ )

となるような非負の整数  $i_0$  が存在し、 $\sum_{j=-\infty}^{i_0-1} a_{i,j}$  は有界であると仮定する。このとき、 $\tilde{b}_{i,i_0} =$

$-\sum_{j=-\infty}^{i_0-1} a_{i,j} f_{i-j}(x_j)$  は有界で、 $\limsup_{i \rightarrow \infty} x_i \leq \frac{\limsup_{i \rightarrow \infty} \tilde{b}_{i,i_0}}{1-q}$  (respect.  $\liminf_{i \rightarrow \infty} x_i \geq \frac{\limsup_{i \rightarrow \infty} \tilde{b}_{i,i_0}}{1-q}$ )

となる。

さらに、a)  $\lim_{i \rightarrow \infty} \tilde{b}_{i,i_0} = 0$ 、もしくは b)  $\liminf_{j \rightarrow \infty} (\liminf_{i \rightarrow \infty} a_{i,j}) > 0$ 、かつ、 $\inf_{j \geq 0} f_j(x) \geq \underline{f}(x)$

(respect.  $\sup_{j \geq 0} f_j(x) \leq \underline{f}(x)$ ),  $x \in (-\infty, +\infty)$  と  $f(0) = 0$  を満たすような  $(-\infty, +\infty)$  で狭義単調増加関数  $\underline{f}(x)$  が存在すると仮定する。このとき、 $\lim_{i \rightarrow \infty} x_i = 0$  が成り立つ。

$\sum_{j=-\infty}^{i_0-1} a_{i,j} = \sum_{k=(i-i_0)+1}^{\infty} a_{i,i-k}$  であることに注意しよう。(1.1) が convolution タイプ、すなわち、 $a_{i,j} = a_{i-j}$ 、 $-\infty < j \leq i$  のとき、条件  $\lim_{i \rightarrow \infty} \tilde{b}_{i,i_0} = 0$  は  $\sum_{k=0}^{\infty} a_k < +\infty$  と同等である。なぜならば、これは任意の正定数  $i_0 \geq 0$  に対して、 $\lim_{i \rightarrow \infty} \sum_{k=(i-i_0)+1}^{\infty} a_k = 0$  と同等であるからである。

**補題 2.2**  $f(x) \neq x$  で  $\{x_i\}_{i=0}^{\infty}$  を (1.1) の解とする。 $x_i$  が 0 のまわりで振動し、

$\lambda = \sup_{i \geq 0} \sum_{k=0}^i q^{i-k} \sum_{j=-\infty}^k a_{k,j} < +\infty$  ならば、 $x_i$  は有界である。

**注意 2.1**  $f(x) \neq x$  で  $\lambda < +\infty$  ならば、補題 2.2 より、0 のまわりを振動する (1.1) の任意の解  $x_i$  は上にも下にも有界である。

ここで、 $r_1 = \sup_{i \geq 0} \sum_{k=0}^i q^{i-k} (\sum_{j=0}^k a_{k,j})$  とおく。次の主定理の証明ができる。

**定理 2.1**  $f(x)$  が  $(-\infty, +\infty)$  で連続で、任意の  $L < 0$  に対して  $-r_1 f(-r_1 f(L)) > L$  とする。また、次式を仮定するとき、(1.1) の零解は大域漸近安定である。

$$\lim_{k_1 \rightarrow \infty} (\limsup_{i \rightarrow \infty} \sum_{k=k_1+1}^{\infty} a_{i,i-k}) = 0. \quad (2.1)$$

(証明) 補題 2.1 より、(1.1) の解  $x_i$  が 0 のまわりで振動すると仮定する。

I) はじめに、 $f(x) \neq x$  の場合を考えよう。(1.1) の解  $x_i$  は補題 2.2 によって有界である。 $\underline{x} = \liminf_{i \rightarrow \infty} x_i < 0$  を仮定し、 $M = \sup_{-\infty < i < +\infty} |f(x_i)| < +\infty$  とおく。また、任意の  $0 < \epsilon < \bar{x}$  と  $[0, \epsilon]$  での連続関数  $F(x) = -r_1 f(-r_1 f(x) + 2x) - 3x$  をとる。 $F(0) = -r_1 f(-r_1 f(\bar{x})) > \bar{x}$  となるので、 $x = 0$  での  $F(x)$  の連続性により、 $F(\epsilon_0) = -r_1 f(-r_1 f(\bar{x} - \epsilon_0) + 2\epsilon_0) - 3\epsilon_0 > \bar{x}$  となる定数  $0 < \epsilon_0 < \epsilon$  が存在する。 $\underline{x} = \liminf_{i \rightarrow \infty} x_i < 0$  により、この  $\epsilon_0 > 0$  に対し、 $i \geq i_0$  ならば、 $x_i > \bar{x} - \epsilon_0$  となる正整数  $i_0$  が存在する。仮定 (2.1) より、 $\epsilon_1 = (1-q)\epsilon_0/M > 0$  に対して、

$$\sum_{j=-\infty}^{(i-k_1)-1} a_{i,j} = \sum_{k=k_1+1}^{\infty} a_{i,i-k} < \epsilon_1, \quad i \geq i_1 \geq 2k_1 + i_0, \quad \text{かつ} \quad q^{k_1+1} < \epsilon_0/M.$$

となる正整数  $i_1$  と  $k_1 \geq i_0$  が存在する。このとき、 $l \geq i_1$  と  $\bar{b}_{l,l-k_1} = - \sum_{j=-\infty}^{(l-k_1)-1} a_{l,j} f_{l-j}(x_j)$  に対して、

$$|\bar{b}_{l,l-k_1}| \leq \left( \sum_{j=-\infty}^{(l-k_1)-1} a_{l,j} \right) M = \left( \sum_{k=k_1+1}^{\infty} a_{l,l-k} \right) M < \epsilon_1 M = (1-q)\epsilon_0,$$

となり、よって、 $i \geq i_1 + k_1$  に対して、 $|\sum_{k=i-k_1}^i q^{i-k} \bar{b}_{k,k-k_1}| \leq \sum_{k=i-k_1}^i q^{i-k} (1-q)\epsilon_0 < \epsilon_0$ .

a)  $x_{i+1}$ ,  $i \geq i_1 + k_1$  の上界を考える。

$$x_{i+1} = qx_i - \sum_{j=i-k_1}^i a_{i,j} f_{i-j}(x_j) + \bar{b}_{i,i-k_1}, \quad i \geq i_1 + k_1.$$

i) ある  $i \geq i_1 + k_1$  に対して、 $x_{i+1} > x_i$  であり、 $\underline{x} - \epsilon_0 < x_{g(i)} = \min_{i-k_1 \leq j \leq i} x_j < 0$  となる正整数  $g(i) \in \{i-k_1, i-k_1+1, \dots, i\}$  が存在する場合を仮定する。このとき、(1.1) により、

$$\begin{aligned} x_{i+1} &\leq q^{i-g(i)+1} x_{g(i)} - \left( \sum_{k=g(i)}^i q^{i-k} \sum_{j=k-k_1}^k a_{k,j} \right) f(\underline{x} - \epsilon) - \sum_{k=i-k_1}^i q^{i-k} \bar{b}_{k,k-k_1} \\ &\leq - \left( \sum_{k=i-k_1}^i q^{i-k} \sum_{j=k-k_1}^k a_{k,j} \right) f(\underline{x} - \epsilon) + \epsilon_0 \leq -r_1 f(\underline{x} - \epsilon) + \epsilon_0 \leq R_{\underline{x}} \end{aligned}$$

となる。ここで  $R_{\underline{x}} = -r_1 f(\underline{x} - \epsilon_0) + 2\epsilon_0$  である。

ii)  $x_{i+1} > x_i$  かつ、ある  $i \geq i_1 + k_1$  に対して、 $x_i, x_{i-1}, \dots, x_{i-k_1} \geq 0$  となる場合を仮定する。

$x_j \geq 0$ ,  $i-k_1 \leq j \leq i$   $q^{k_1+1} M < \epsilon_0$  かつ  $|\sum_{k=i-k_1}^i q^{i-k} \bar{b}_{k,k-k_1}| < \epsilon_0$  なので、

$$\begin{aligned} x_{i+1} &= q^{k_1+1} x_{i-k_1} - \left( \sum_{k=i-k_1}^i q^{i-k} \sum_{j=k-k_1}^k a_{k,j} f_{k-j}(x_j) \right) + \sum_{k=i-k_1}^i q^{i-k} \bar{b}_{k,k-k_1} \\ &\leq - \sum_{k=i-k_1}^i q^{i-k} \sum_{j=k-k_1}^{(i-k_1)-1} a_{k,j} f(\underline{x} - \epsilon) + 2\epsilon_0 \leq R_{\underline{x}}. \end{aligned}$$

となる。ゆえに、i) と ii) の両方の場合に対して、 $x_{i+1} \leq R_{\underline{x}}$ ,  $i \geq i_1 + k_1$  を得る。

b) 次に  $x_{i+1} = - \sum_{j=i-k_1}^i a_{i,j} f_{i-j}(x_j) + \bar{b}_{i,i-k_1}$ ,  $i \geq i_1 + 2k_1$  の下界を考えよう。

iii) ある  $i \geq i_1 + 2k_1$  に対し、 $x_{i+1} < x_i$  であり、 $R_{\underline{x}} \geq x_{\bar{g}(i)} = \max_{i-k_1 \leq j \leq i} x_j > 0$  となる正整数  $\bar{g}(i) \in \{i-k_1, i-k_1+1, \dots, i\}$  が存在する場合を仮定する。

このとき、同様に、 $x_{i+1} \geq -r_1 f(R_{\underline{x}}) - \epsilon_0 > S_{\underline{x}}$  を得る。ここで、 $S_{\underline{x}} = -r_1 f(R_{\underline{x}}) - 2\epsilon_0$  である。

iv)  $x_{i+1} < x_i$  および、ある  $i \geq i_1 + 2k_1$  に対し、 $x_i, x_{i-1}, \dots, x_{i-k_1} \leq 0$  の場合を仮定する。このとき、同様に、

$$\begin{aligned} x_{i+1} &= q^{k_1+1} x_{i-k_1} - \sum_{k=i-k_1}^i q^{i-k} \sum_{j=k-k_1}^i a_{k,j} f_{k-j}(x_j) + \sum_{k=i-k_1}^i q^{i-k} \bar{b}_{k,k-k_1} \\ &\geq - \left( \sum_{k=i-k_1}^i q^{i-k} \sum_{j=k-k_1}^{(i-k_1)-1} a_{k,j} \right) f(R_{\underline{x}}) - 2\epsilon_0 \geq S_{\underline{x}}. \end{aligned}$$

このように, iii) と iv) の両方の場合に対し,  $x_{i+1} \geq S_{\underline{x}}$ ,  $i \geq i_1 + 2k_1$  を得る.  $S_{\underline{x}} - \epsilon_0 = F(\epsilon_0) > \underline{x}$  なので,  $x_{i+1} \geq S_{\underline{x}} > \underline{x} + \epsilon_0$ ,  $i \geq i_1 + 2k_1$  となる. これは矛盾する. よって,  $\underline{x} = 0$  であり, 補題 2.1 より,  $\lim_{i \rightarrow \infty} x_i = 0$  を得る.

II)  $f(x) = x$  の場合に対し, 同様に  $\limsup_{i \rightarrow \infty} |x_i| < +\infty$  を得る. 残りは I) と同様に証明できる. よって, 結論を得る.  $\square$

(1.1) の convolution タイプに対して, 条件 (2.1) は  $\sum_{k=0}^{\infty} a_k < +\infty$  になる.

定理 2.1 を特に  $f(x) = x$  と  $f(x) = e^x - 1$  に適用すると, 次の定理を得る.

**定理 2.2** (1.1) に対して, (2.1) を仮定し, 次の条件を成り立つとする.

$$\begin{cases} f(x) = x \text{ ならば,} & r_1 < 1, \\ f(x) = e^x - 1 \text{ ならば,} & r_1 \leq 1. \end{cases} \quad (2.2)$$

このとき, (1.1) の零解は大域漸近安定である.

特に,  $f_j(x) = x$ ,  $0 \leq j < \infty$  となる線形の場合に対し, (2.1) と次の条件を成り立つとする.

$$\begin{cases} a_{i,i} \geq q, i \geq 0 \text{ ならば,} & r_1 < 1 + q \\ a_{i,i} < q, i \geq 0 \text{ ならば,} & \bar{r}_1 < 1 \end{cases} \quad (2.3)$$

ここで,  $\bar{r}_1 = \sup_{i \geq 0} \sum_{k=0}^i (q - \liminf_{l \rightarrow +\infty} a_{i,l})^{i-k} (\sum_{j=0}^{k-1} a_{k,j})$  である. このとき, (1.1) の零解は大域漸近安定である. この場合,  $q_x - a_{i,i}x = (q - a_{i,i})x$ ,  $i \geq 0$  なので,  $q \geq 1$  も考えられる.

定理 2.2 は (1.1) の零解の一樣漸近安定である十分条件を導くのに便利である.

最後に,  $a_0 > \sum_{j=1}^{\infty} a_j$  かつ  $f(x) = f_0(x) = e^x - 1$  という条件のもとで, 次の convolution タイプの差分方程式

$$x_{i+1} = x_i - \sum_{j=-\infty}^i a_{i-j} f_{i-j}(x_j), \quad i = 0, 1, 2, \dots \quad (2.4)$$

に対する大域的漸近安定性の条件を考える.

**定理 2.3** 条件 (1.2) と  $-\infty < j \leq i$  において  $a_{i,j} = a_{i-j} \geq 0$  に加え,

$$\begin{cases} \bar{r}_1 > \bar{r}_2 \geq 0, & \bar{r} = \bar{r}_1 + \bar{r}_2 \leq 2, \text{ かつ} \\ \bar{r}_1 + \bar{r}_2 > 1 \text{ ならば,} & \bar{r}_1 + \bar{r}_2 - \frac{\bar{r}_2}{\bar{r}_1} e^{\bar{r}_1 + \bar{r}_2 - 1} \geq 0 \end{cases} \quad (2.5)$$

ならば, (2.4) の零解が大域的漸近安定である. ここで,  $\bar{r}_1 = a_0$  および  $\bar{r}_2 = \sum_{j=1}^{\infty} a_j$  である.

### 3 $|f_i(x)| \leq |x|$ , $i \geq 0$ の一般的な場合

ここで, 次の方程式の解  $x_i$  の有界性の条件と零解の大域吸引性の条件を考えよう.

$$x_0 = \phi_0, \quad x_{i+1} = qx_i - \sum_{j=0}^i a_{i,j} x_j + b_i, \quad b_i = \sum_{j=-\infty}^{-1} a_{i,j} \phi_j, \quad i \geq 0. \quad (3.1)$$

(3.1) より,  $|x_0| = |\phi_0|$ ,  $|x_{i+1}| \leq \sum_{j=0}^i |\bar{a}_{i,j}| |x_j| + |\bar{b}_i|$ ,  $i \geq 0$  となる. ここで,  $\bar{b}_i = b_i$ ,  $i \geq 0$ ,  $\bar{a}_{i,j} = a_{i,j}$ ,  $0 \leq j \leq i-1$  かつ  $\bar{a}_{i,i} = -q + a_{i,i}$  である.

このとき, Crisci 他 [2] の定理 3.1 と系 3.1 を改良する次の定理を得る.

**定理 3.1**  $A = \sup_{0 \leq j \leq i} |\bar{a}_{i,j}| < +\infty$  と  $B = \max(|\phi_0|, \sup_{i \geq 0} |\bar{b}_i|) < +\infty$  を仮定と,  $|x_i| \leq (1+A)^i B$ ,  $i \geq 0$  である. 特に,  $\bar{A}_0 = \sup_{i \geq i_0} \sum_{j=i_0}^i |\bar{a}_{i,j}| < 1$  となるような正整数  $i_0$  が存在するならば,  $x_i$  は有界であり, また  $|x_i| \leq (1+A)^{i_0} B / (1-\bar{A}_0) < +\infty$ ,  $i \geq i_0$  となる. さらに,  $\lim_{i \rightarrow \infty} b_i = 0$  及び  $\lim_{k_1 \rightarrow \infty} (\lim_{i \rightarrow \infty} \sum_{k=k_1+1}^i |a_{i,i-k}|) = 0$  ならば,  $\lim_{i \rightarrow \infty} x_i = 0$  となる.

Crisci 他 [1] の証明と同様に, さらに次の定理を得る.

**定理 3.2**  $\bar{A} = \sup_{j \geq 0} \sum_{i=j}^{\infty} |\bar{a}_{i,j}| < 1$  および  $\bar{B} = |\phi_0| + \sum_{i=0}^{\infty} |\bar{b}_i| < +\infty$  ならば,  $\sum_{i=0}^{\infty} |x_i| \leq \bar{B} / (1-\bar{A}) < +\infty$  であり, さらに  $\lim_{i \rightarrow \infty} x_i = 0$  となる.

線形方程式

$$x_{i+1} = qx_i - \sum_{j=0}^i a_{i,j} x_j + b_i, \quad b_i = \sum_{j=-\infty}^{-1} a_{i,j} \phi_j, \quad i \geq 0 \quad (3.2)$$

に対して, (3.2) の零解の大域安定性に関する次の定理を得る (Crisci 他 [2] の定理 3.1 および系 3.1 を参照).

**定理 3.3** 線形方程式 (3.2) に対し, 次を仮定する.

$$\begin{cases} \bar{c}_{i,j} = a_{i-1,j} - a_{i,j}, & 0 \leq j \leq i-2, \quad i \geq 2 \\ \bar{c}_{i,i-1} = -q + a_{i-1,i-1} - a_{i,i-1}, & i \geq 1, \quad \bar{c}_{i,i} = 1 + q - a_{i,i}, \quad i \geq 0 \\ \bar{d}_0 = b_0 \quad \text{と} \quad \bar{d}_i = b_i - b_{i-1}, & i \geq 1. \end{cases}$$

i)  $C = \sup_{0 \leq j \leq i} |\bar{c}_{i,j}|$  および  $D = \max(|\phi_0|, \sup_{i \geq 0} |\bar{d}_i|) < +\infty$  を仮定するとき,  $|x_i| \leq (1+C)^{i_0} D$ ,  $i \geq 0$

となる. 特に  $\bar{C}_0 = \sup_{i \geq i_0} \sum_{j=i_0}^i |\bar{c}_{i,j}| < 1$  となる正整数  $i_0$  が存在するならば,  $x_i$  が有界であり,  $|x_{i+1}| \leq (1+C)^{i_0} D / (1-\bar{C}_0) < +\infty$ ,  $i \geq i_0$  である. さらに,

$$\lim_{k_1 \rightarrow \infty} (\lim_{i \rightarrow \infty} \sum_{k=k_1+1}^i |\bar{c}_{i,i-k}|) = 0 \quad \text{かつ} \quad \lim_{i \rightarrow \infty} (b_i - b_{i-1}) = 0$$

ならば,  $\lim_{i \rightarrow \infty} x_i = 0$  となる.

ii) もし,  $\bar{C} = \sup_{j \geq 0} \sum_{i=j}^{\infty} |\bar{c}_{i,j}| < 1$  かつ  $\bar{D} = \sum_{i=0}^{\infty} |b_{i+1} - b_i| + |b_0| < +\infty$  ならば,  $\sum_{i=1}^{\infty} |x_i| \leq \bar{D} / (1-\bar{C}) < +\infty$  となり, さらに  $\lim_{i \rightarrow \infty} x_i = 0$  である.

**例 3.1**  $a_{i,j} = a$ ,  $0 \leq j \leq i$  とする. この場合, (2.1) は満足しないが,  $2q < a < 2$  および  $\sum_{i=0}^{\infty} |b_{i+1} - b_i| + |b_0| < +\infty$  のとき,  $\bar{C}_0 < 1$  は  $|1+q-a| + q < 1$  となり, 定理 3.3 より,  $\lim_{i \rightarrow \infty} x_i = 0$  が成り立つ.

## 4 応用

次の Volterra 差分方程式を考える.

$$x_{i+1} = x_i - \sum_{j=-\infty}^i a_{i-j} f(x_j), \quad i = 0, 1, 2, \dots, \quad (4.1)$$

ここで,  $f(x) = e^x - 1$ ,  $a_j = \lambda c_j$ ,  $0 \leq j < +\infty$ ,  $\sum_{j=0}^{\infty} a_j = \lambda$ , さらに,  $i = 0, 1, 2, \dots$  に対し,

$$c_0 = \int_0^1 (1-t)k(t)dt, \quad c_{i-j} = \int_0^1 \int_0^1 k(i-j+u-s)dsdu, \quad -\infty < j \leq i-1, \quad (4.2)$$

かつ  $\sum_{j=0}^{\infty} c_j = \int_i^{i+1} \int_{-\infty}^u k(u-s)dsdu = \int_0^{\infty} k(t)dt = k^* < +\infty$  である.

このとき, (4.1) に定理 2.2 の結果を応用できる. たとえば,  $k(t) = \frac{1}{\sqrt{\pi\alpha}} e^{-\alpha t^2}$ ,  $\alpha > 0$  とおくと,  $k^* = 1$  および  $c_0 = \frac{1}{\sqrt{\pi\alpha}} \int_0^1 (1-t)e^{-\alpha t^2} dt \geq \frac{1}{\sqrt{\pi\alpha}} \int_0^1 (1-t)(1-\alpha t^2) dt = \frac{1}{\sqrt{\pi\alpha}} (\frac{1}{2} - \frac{\alpha}{12})$  である. ここで少なくとも,  $\alpha \leq \frac{1}{4\pi}$  に対して,  $c_0 > \frac{1}{2}$  を得て, 条件  $a_0 > \sum_{j=1}^{\infty} a_j$  が成り立ち, 特に,  $\sum_{j=1}^{\infty} a_j/a_0 \leq 1/e$  ならば, 定理 2.3 の (2.5) を満足し, (4.1) の零解は  $0 < \lambda \leq 2$  ならば, 大域漸近安定である.

定理 2.2 を (4.1) の  $f(x) = x$  の場合に適用すると, (4.1) の零解の一樣漸近安定性の十分条件を得る. たとえば,  $0 < \lambda < 2$  ならば,  $k(t) = te^{-t}$  の (4.1) の場合の零解は一樣漸近安定である (cf. Song, Baker [4]).

他の応用として, 次の離散 Wazewska-Czyzewska-Lasota モデルがある (Wazewska, Czyzewska, Lasota [7] 参照).

$$y_{i+1} = qy_i + \sum_{j=0}^{\infty} \beta_j e^{-\gamma y_{i-j}}, \quad i = 0, 1, 2, \dots, \quad 0 < q < 1, \quad \gamma > 0, \quad \beta_j \geq 0, \quad \beta = \sum_{j=0}^{\infty} \beta_j > 0. \quad (4.3)$$

正の平衡点  $y^*$  は  $y^* = \beta e^{-\gamma y^*} / (1-q)$  の正根で, 定理 2.2 の (2.2) より,  $\gamma y^* \leq 1$  ならば,  $y^*$  は大域漸近安定である.

## 参考文献

- [1] M. R. Crisci, V. B. Kolmanovskii, E. Russo, A. Vecchio, Stability results on some direct quadrature methods for Volterra integro-differential equations, *Dynam. Systems Appl.* **7** (1998), 501-518.
- [2] M. R. Crisci, V. B. Kolmanovskii, E. Russo, A. Vecchio, A priori bounds on the solution of a nonlinear Volterra discrete equation. Special issue: Hereditary systems qualitative properties and applications, Part I. *Stab. Control Theory Appl.* **3** (2000), 38-47.
- [3] Y. Muroya, E. Ishiwata, N. Guglielmi, Global stability for nonlinear difference equations with variable coefficients, *J. Math. Anal. Appl.* (2007), doi:10.1016/j.jmaa.2006.12.028.
- [4] Y. Song, Ch.T.H. Baker, Qualitative behavior of numerical approximations to Volterra integro-differential equations, *J. Comput. Appl. Math.* **172** (2004), 101-115.
- [5] K. Uesugi, Y. Muroya, E. Ishiwata, On the global attractivity for a logistic equation with piecewise constant arguments, *J. Math. Anal. Appl.* **294** (2004), 560-580.
- [6] A. Vecchio, Stability of backward differentiation formulas for Volterra integro-differential equations, *J. Comput. Appl. Math.* **115** (2000), 565-576.
- [7] M. Wazewska-Czyzewska, A. Lasota, Mathematical problems of the dynamics of the red-blood cells systems, *Ann. Polish Math. Soc. Series III, Appl. Math.* **17** (1988), 23-40.